

マルコによる福音書の概要

2014年4月17日

古本 靖久

1、聖歌 367番 「イエスキミは いとうるわし」

2、お祈り

3、今日の内容の説明

今回からマルコによる福音書の学びをしていきたいと思います。月に二回、または一回、ゆっくりと進めていく予定です。このようなノートを毎回作る予定ですので、もしご都合が悪くお休みされた場合でも、言ってくださると、印刷物をお渡しいたします。

それでは、さっそく今回の内容に入っていきます。

今回はマルコ福音書の本文に入る前に、この福音書がどのようにして成立していったのか、そもそもどうして書く必要があったのか、見ていきたいと思います。そしてそのことを知ることによって、聖書のメッセージがさらに深く届くことを望んでいます。それでは始めていきましょう。

<書かれた年代>

まずマルコ福音書が書かれたとされる年代について、見ていきたいと思います。とはいっても、今わたしたちが持っている本のように発行年が書かれているわけではなく、また、聖書の原本（最初の原稿）は残っていない（写本がパピルスの形で残っている）ので、様々な意見に分かれています。大まかに見ますと、以下のような年表が出来上がります。

年代（紀元後）	出来事	書かれた文書
30年ごろ	イエス処刑される	
47年ごろ	パウロ第1回伝道旅行	
49～52年ごろ	パウロ第2回伝道旅行	1テサロニケ
53～56年ごろ	パウロ第3回伝道旅行	ガラ、フィリ、フィレ、1,2コリ
59～60年		ローマ
64年	皇帝ネロの迫害	
66年	第一次ユダヤ戦争	
70年	エルサレム陥落	マルコ福音書（70年前後）
80～90年ごろ		マタイ・ルカ福音書
90年代後半		ヨハネ福音書

なぜマルコ福音書が 70 年前後だと考えられているかといいますと、マルコ 13 章の記述がポイントになるそうです。13 章 14 節の「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら」を 70 年前のエルサレム包囲と見たり、神殿の幕が二つに裂けたことを 70 年のエルサレム陥落と結びつけて考えているようです。また、64 年の皇帝ネロの迫害もこの 13 章の内容を想起させることから、65 年～70 年くらいに書かれたのではないかという見解が一般的です。

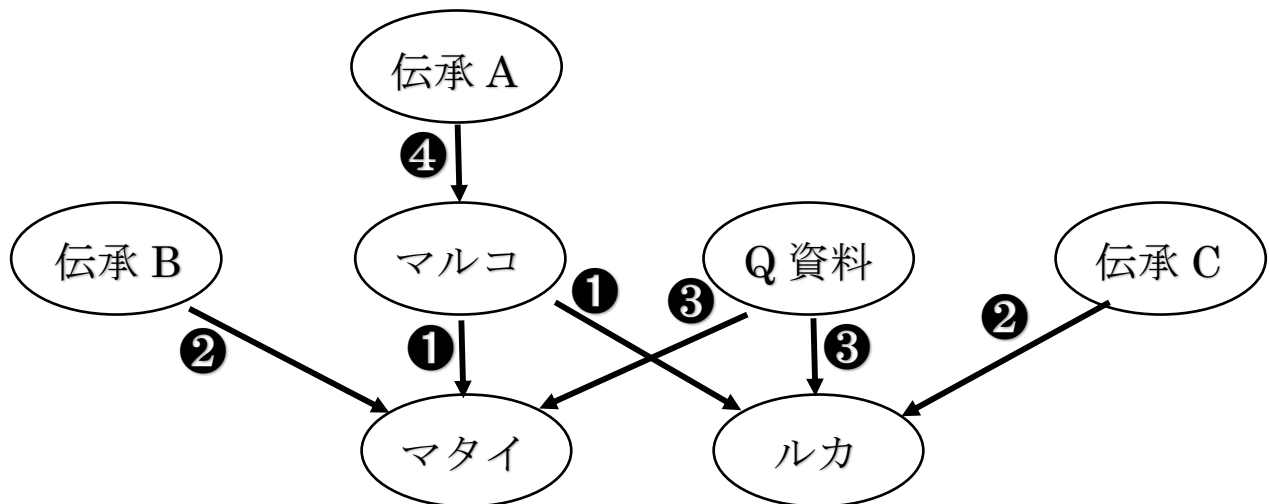
以上の中から押さえておきたいのは、

- ① マルコ福音書は 4 つの福音書の中で**最初に書かれた**。
- ② マルコ福音書より前に、パウロの手紙は書かれていた。
- ③ マルコ福音書は、イエス様が十字架につけられて **40 年経ってから書かれた**。

<聖書はどのようにしてできていったか>

わたしたちは製本された聖書を使っていますから、新約聖書のうち最初に書かれたのは「マタイ」であると何となく考えてしまいがちですが、そうではないと一般的に言われています。しかも、福音書より前に、パウロの手紙は書かれていました。ただし、先ほども言いましたように、正確な年代は特定することが出来ないのです、他の見解もあります。

さて、少し詳しく見ていきましょう。マタイ・マルコ・ルカはどのようにして書かれたのでしょうか。



ヨハネ福音書は別系統で書かれたと言われているので、ここには書いておりません。

さて、マタイ・マルコ・ルカの 3 つの福音書は「共観福音書」と呼ばれます。実は 3 つの福音書には共通した記事が多いのです。新共同訳聖書には小見出しのところに、他の聖書箇所が書いてある場合があります。そこをよく見てみると、マタイ・マルコ・ルカに共通している記事はどこなのかがよくわかります。たとえばマルコ 1:9-11 にあるイエス様の洗礼の場面、ここの小見出しを見てみると、(マタ 3:13-17、ルカ 3:21-22) とあります。こういう 3 つの福音書に共通する箇所は、①のようにマルコを手本に書かれたと考えられます。

また②のように、マタイにしかない箇所（マタイ 2:1～12：占星術の学者たちが訪れる）は伝承 B から、ルカにしかない箇所（ルカ 2:8～21：羊飼いと天使）は伝承 C から、さらにマタイとルカにはあって、マルコにはない箇所（マタイ 7:1～5、ルカ 6:37～42：人を裁くな）などはイエス様の言葉資料である Q 資料を用いた（③）と考えられています。

しかし、伝承や Q 資料はあくまでも神学者たちの想像によるもので、「こういうものがあつたら説明しやすい」というくらいで考えてください。ここで大事なのは、マルコ福音書は伝承をもとに書かれたということ。そしてマルコ福音書が書かれる前には、イエス様の言葉や奇跡の出来事、あるいは受難物語といった伝承が個別に存在していたということです。

加えてパウロの手紙も存在していました。マルコ福音書の著者がそれを知っていたかどうかはわかりませんが、もし知っていたとしたら、なぜこの福音書が書かれたのか、ヒントにもなると思います。

<マルコ福音書の成立>

さて、イエス様が十字架にかけられてからマルコ福音書が書かれるまで 40 年近く経っていました。40 年って簡単にいえますけど、今（2014 年）の 40 年前、どんなことが起きていたか覚えておられるでしょうか。調べてみますと、1974 年 1 月には長崎の軍艦島が炭鉱を閉鎖し、3 か月後には全島民が島を離れました。また 3 月には小野田元少尉がフィリピンから帰国しました。さらに 4 月にフランスの現職大統領ジョルジュ・ポンピドゥーが 62 歳で亡くなっています。たとえばどうでしょう。ポンピドゥー大統領をよく知る人物が、その生き方を書き残したいと思ったら、自分の記憶だけに頼ってはとても無理です。たくさんの言い伝えや記録、また故人をよく知る人に話を聞いてみる。そしてそこから記事をまとめていくのですが、そこには著者の故人に対する思いが入っていきます。自分のイメージにあった記事を多く取り上げたり、内容を少し変えてみたり。

マルコ福音書の成立も、イエス様の死後 40 年がたった中で書かれました。あとでも触れますが、著者はイエス様の弟子でもないどころか、そんなに近い人ではなかったようです。その彼がなぜ、イエス様のことをまとめなければならなかったのでしょうか。そこにはいくつか理由が考えられます。

1、イエス様と直接行動した弟子たちや信徒が死んでいった。

今より平均寿命が短いだけではなく、キリスト教に対する迫害でペトロやパウロ、ヤコブなどは亡くなったとされています。イエス様のことを知っている人がいるうちに、まとめようとしたのではないのでしょうか。

2、教会の礼拝に必要なだった。

わたしたちも礼拝の中で聖書を読み、イエス様の言動を思い起こします。同じように礼拝の中で用いるためにまとめたのかもしれない。

3、異邦人（ユダヤ人以外の人）に伝道していくため。

マルコ福音書の著者がいた共同体には、異邦人信徒が中心であったと思われます。そして、世界伝道（異邦人伝道）をおこなったと言われていています。マルコ福音書は非常に稚拙なギリシア語で書かれています。それは教育水準が低い人が書いたためだと一般的に言われていますが、広い世界で読まれるために、普段使わない言語を用いたとも考えられるのではないのでしょうか。

4、再臨（イエス様が天から再びやってくる）が遅れていた。

そこで、福音書の中でイエス様が到来することは間違いないことを強調しつつ、終末への熱意と緊張を保つように語る必要がありました。

こうして、マルコ福音書が成立した背景を知ると、今、この場にいるわたしたちはどのように感じるのでしょうか。イエス様が十字架につけられた時代に生きていた人は、この場にはいません。でもマルコ福音書を読むとなんだかイエス様が近づいてくるように思えるのはわたしだけでしょうか。イエス様に直接会ったことのない人たち、またユダヤ教のこともよく知らない人たちが、神さまのみ業を感じ、礼拝する。イエス様、来てくださいと祈る。そのために、この福音書はまとめられたと言えるのではないのでしょうか。

<最初の福音書として>

福音書という文学ジャンル（という言い方が正確かは疑問ですが）を最初につくったのはマルコ福音書です。福音書とはイエス様の生涯とその言葉をあらわしたものです。

先ほど、パウロの手紙はマルコ福音書よりも先に書かれたと言いましたが、パウロの手紙の中にはイエス様の地上での公生涯の様子は書かれていません。パウロが大事にしたのは、イエス様の十字架の死と復活によって行われた神さまの救済行為であって、イエス様の生涯には興味を示していません。（あるいは、知らなかっただけなのか）。

これは想像ですが、マルコ福音書の著者がパウロの手紙の存在を知っていたとします。直に読んだか、手紙を読んだ人に会ったのか、とにかく手紙の内容を見たときに、物足りなさを感じた。くどいようですが、あくまで想像ですが。受難の場面だけではなく、十字架に至るイエス様の生全体、その生き様を神さまの救いの出来事だと信じていたマルコは、自分で「福音書」を書くことにしたのかもしれない。

実際福音書を読むと、イエス様の福音を、より現実に近い形で追体験していくことができます。どういうことかと言いますと、イエス様が語られ行動する時、そこには具体的な場が与えられています。また登場人物も様々です。たとえば中風の人をいやす（マルコ 2:1-12）記事の中には、イエス様、大勢の人、中風の人、四人の男、律法学者が登場します。わたしたちはこの物語を聞く時に、ある時は中風の人に感情移入し、またある時は律法学者に自分を重ね合わせ、追体験します。そしてわたしたちは、イエス様はどのような人で、どこに立ち、誰と行動を共にしていたのか、さらにわたしたちはどう行動していくべきなのかを知らされていくのです。

<どこで書かれたのか>

マルコ福音書の著者は、伝説ではペトロの弟子であったと言われていました。その影響でマルコ福音書はローマで書かれたと考えられたこともありますが、今では退けられています。

また、聖書に何人か出てくるマルコ（使徒 12:12,25、15:37,39、1 ペト 5:13、フィレ 24、コロ 4:10、2 テモ 4:11）でもないと考えられています。

はっきりしているのは著者が異邦人であるということ。また、エルサレムではなくガリラヤを精神的な風土としている（あるいはその近くが生活の場だった？）人物だということです。

とにかくマルコ福音書の著者は、イエス様の活動の場をガリラヤという地方の民衆の中に取り戻そうとしたのかもしれませんが。



ローマ帝国の版図 ↓

イエスが宣教した町々 ↑



<著者の思い入れ>

さて最後になります。このようにマルコ福音書が出来ていく過程で、著者はそれぞれの伝承の中から福音書に採用するものを選択し、編集していく中で、思い入れや強調点も反映されていきます。本人に意図があったのか、あるいはなかったのかはともかく、わたしたちはそれを「マルコの神学」と呼びます。

マルコ福音書の著者がいた共同体は異邦人が中心で、ガリラヤに精神的風土をもっていたと思われま。であるならば、自然と物語の中のイエス様は、ユダヤ教を批判し、ガリラヤで多くの業をおこなわれる方になるように、福音書の中に特徴が出てくるわけです。

この思い入れ（神学）は、本文に入った後でその都度見ていきたいと思しますので、あまり詳しくは述べませんが、以下にさっと挙げてみたいと思います。

1、イエス様は神の子

マルコ福音書は「神の子イエス・キリストの福音の初め。(1:1)」という言葉ではじまります。そして十字架で息を引き取るイエス様を見て「本当に、この人は神の子だった(15:39)」と百人隊長が告白します。イエス様は一体何者なのかという問いを登場人物と共有しながら、わたしたちは神の子であるイエス様の物語を聞いていくのです。

2、奇跡行為者であるイエス様

マルコ福音書の中には、奇跡物語が多く出てきます。しかし奇跡行為そのものよりも、信じる事（信仰）に焦点を当てます。さらにイエス様の治療行為を「教え」と解釈していきます。

3、弟子への批判

マルコ福音書の中には、ペトロをはじめとする弟子たちがイエス様の本質を理解できず、否定的に取り扱われている箇所が多くあります。これらの否定的な見方は、マルコ福音書の著者が挿入したものと考えられています。エルサレム教会への批判なのか、福音を民衆に取り戻そうとしているのか、わたしたちは弟子への批判をどのように受け止めることができるでしょうか。

4、十字架の強調

マルコ福音書はその六分の一がイエス様の最後の一日、その三分の一が最後の週間に充てられているとおり、受難から十字架に向けての道が強調されています。そして十字架によって始めて、イエス様の本質がわかります。

その他にも「メシアの秘密」や「神の国（支配）」の考え方など、福音書には著者の思い入れが反映されていると思われるところがあります。詳しくは本文を見る中で見ていきましょう。

今回の学びは、これで終わります。次回は5月8日(木)10時30分～で、「洗礼者ヨハネ、教えを宣べる（マルコ 1:1～8）」について学んでいきたいと思ひます。